

大阪音楽大学
研究紀要

第六十四号

要 旨 (1)

論 文

ヴィルヘルミーネ・ハイムブルクが描く家庭
—1890年代の作品を中心に 竹田和子 (4)

研究ノート

大阪音楽大学におけるイタリア語学習と伊和辞典についての論考
—辞書を使うことは必要か否か?— 谷口真生子 (17)

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目 (2024年度) (34)

大阪音楽大学
大阪音楽大学短期大学部
(2025)

要 旨

Summaries

【論 文】
Article

ヴィルヘルミーネ・ハイムブルクが描く家庭 —1890年代の作品を中心に

竹田 和子

ドイツ帝政期の人気作家ヴィルヘルミーネ・ハイムブルクはほとんどの作品を、中小市民を主要購読者としていた『ガルテンラウベ』に発表し、同誌を代表する作家E・マルリットが亡くなると、その後継者と見なされるようになった。しかしハイムブルクの作品は、一見典型的なハッピーエンドを持ちながら、その醒めた表現や、登場人物たちの言葉には伝統的な市民階級の価値観とは合わない要素もあり、市民階級の理想を掲げたマルリットとは明らかに異なっている。本論文ではマルリットの死後の1890年代の3つの作品に見られるシンデレラ・モチーフ、「親密な家族」、「母役割」を中心に、ハイムブルク作品に表われた市民階級の価値観の揺らぎを検討する。

キーワード：ヴィルヘルミーネ・ハイムブルク、ドイツ帝政期、市民階級の価値観、
娯楽小説、家庭

Das Bild der Familie von Wilhelmine Heimburg — Im Zusammenhang mit ihren Romanen der 1890er Jahren

TAKEDA Kazuko

Wilhelmine Heimburg (1848–1912), eine der populärsten Schriftstellerinnen im deutschen Kaiserreich, veröffentlichte fast alle ihre Werke in der Familienzeitschrift Gartenlaube, deren Hauptpublikum das Kleinbürgertum war. Nach dem Tod der diese Zeitschrift vertretenden Autorin E. Marlitt galt sie als deren Nachfolgerin. Zwar haben Heimburgs Romane häufig ein typisches Happy End, doch in ihrer nüchternen Erzählweise bzw. in der Sprache der Figuren sind oft Elemente erkennbar, die mit den Wertvorstellungen des damaligen Bürgertums nicht in Einklang stehen und sich damit deutlich von ihrer Vorgängerin unterscheiden. In dieser Arbeit wird das Schwanken der bürgerlichen Wertvorstellungen untersucht, das sich in einigen Motiven wie dem Aschenputtelmotiv, der „intimen Familie“ oder der „Mutterrolle“ in drei Werken Heimburgs aus den 1890er Jahren zeigt.

Stichwörter：Wilhelmine Heimburg, das deutsche Reich, die Wertvorstellungen des Bürgertums, Unterhaltungsroman, Familie

【研究ノート】

Note

大阪音楽大学におけるイタリア語学習と伊和辞典について の論考

—辞書を使うことは必要か否か?—

谷口 真生子

本学に入学した学生が必修外国語科目に母語ではないイタリア語を選んだ場合、イタリア語を学習するにあたり、教科書は言うまでもなく、場合によるがそれを補助してくれる問題集や参考書が必要となる。同時に必携であるはずのものが伊和辞典であろう。ところが現実としては、伊和辞典を持たずにイタリア語を学習する学生がいる。また、伊和辞典を所持していても、それをうまく活用していない、使用の仕方を分からないまま授業を受講して学部は2年間、短期大学部は1年間でイタリア語から離れてしまう学生がほとんどであるのが現状である。本稿では、本学のイタリア語の授業で実際に学生が所持している伊和辞典についてを概観し、イタリア語文法の授業での伊和辞典が必要かつ重要なものであるかを解説し、辞典の良いところと問題点を指摘し、イタリア語学習でどう使用して行くのが良いかを示し、伊和辞典の有用な活用の仕方を提案するものである。

キーワード：伊和辞典、イタリア語学習、カタカナ表記、国際音声記号、不規則変化形

Riflessione sullo studio della lingua italiana come materia obbligatoria e sui dizionari italiano-giapponese presso l'Osaka College of Music

—È necessario o no consultare il dizionario quando si studia l'italiano?—

TANIGUCHI Makiko

Se uno studente che si iscrive all'università sceglie l'italiano, che non è la sua lingua madre, come materia di lingua straniera obbligatoria, avrà bisogno di un libro di testo o di esercizi di grammatica che lo aiutino nell'apprendimento dell'italiano. Allo stesso tempo, avrà anche bisogno di un dizionario italiano-giapponese. Tuttavia, in realtà, ci sono studenti che imparano l'italiano senza utilizzare il dizionario italiano. Inoltre, anche se ce l'hanno, la maggior parte degli studenti non ne fa buon uso, prende lezioni senza sapere come usarlo e lascia l'italiano dopo due anni di apprendimento e un anno di junior

要 旨

college. Questo articolo fornisce una panoramica del dizionario italiano-giapponese attualmente in possesso degli studenti dei corsi di lingua italiana presso la nostra università, spiega come sia necessario e importante nei corsi di grammatica italiana, evidenzia i vantaggi e i problemi dei dizionari, mostra come utilizzarli nell'apprendimento della lingua italiana e propone come utilizzare il dizionario in modo utile.

Parole chiave: dizionario italiano-giapponese, apprendimento dell'italiano, trascrizione fonetica in giapponese (katakana) , alfabeto fonetico internazionale, verbi irregolari (sostantivi plurali)

ヴィルヘルミーネ・ハイムブルクが描く家庭 —1890年代の作品を中心に

竹田和子

はじめに

ヴィルヘルミーネ・ハイムブルク Wilhelmine Heimbürg (1848-1912)は1878年に、19世紀ドイツ最大の家庭雑誌『ガルテンラウベ』Die Gartenlaube にデビューして以来、毎年のように同誌に作品を発表し、人気作家となった。19世紀のドイツでは、識字率の向上、印刷技術や輸送手段の近代化、販売システムの改革により、読書人口が増大した。まだ複雑で難解な文章を読むことのできない人々のために、世紀半ば頃に生まれたのが家庭雑誌である。比較的安価で、実用的知識や新しい技術、さらに世界の出来事についての分かりやすい解説と簡単な読み物、さらに豊富なイラストを掲載した家庭雑誌は、19世紀後半に爆発的に発行部数を伸ばした。その中でも『ガルテンラウベ』は1875年には382,000部という当時のドイツ語圏で最高の発行部数を記録した雑誌であり、^①この人気を支えたのがE・マルリット E. Marlitt (1825-1887)である。この雑誌がそれまで掲載していたのは、読者が理解しやすいように、主に1回読み切りかせいぜい2、3回連載の短編小説だったのだが、マルリットの長編小説『金髪のエルゼ』„Goldelse“ が1866年に18号に渡って連載されて人気を博すと、長編小説連載が雑誌構成の中心となった。少女が様々な苦難を乗り越えて男性と結ばれるというストーリーが広く読者に受け入れられ、同誌の看板作家となった彼女に憧れ、自分も小説を書きたいと思う女性たちが次々と登場することになった。

ハイムブルクもそのような女性作家たちの一人だったが、マルリットが亡くなったとき、『ガルテンラウベ』編集部の依頼を受けてその遺作を完成させ、「マルリットの後継者」と目されるようになった。^②その後もペースはほとんど変わらず、この雑誌に作品を発表し続けていったが、労働、儉約、勤勉といった市民階級の理想を作品で謳い上げたマルリットとの作風の違いが次第に顕著になっていく。もともとハイムブルク作品の主人公はマルリットと比べて明らかに受動的な性格が強かったが、主人公の人生を淡々と醒めた筆致で追うその描写からは、ハッピーエンドを描いていても、そこにはマルリットのような市民的価値観の勝利に対する歓喜^③より、むしろ作者とそのような理想の間に距離が感じられるようになるのである。さらに全く救いのない結末を持つ作品すら生まれている。

ハイムブルクはマルリットより20歳以上若く、ドイツ帝国成立後に作品を書き始めた。彼女が作品を書いていた時代には、ドイツの工業が大きく発展し、裕福な企業家は経済貴族化する一方、官僚、弁護士、裁判官、医者、大学教員などの教養層は、ドイツの国家、社会

を支える存在と自認していた。1848年の三月革命で自由主義的要求をあげて戦った市民階級の上層部は既にエリート層になり、手工業者や小規模小売店主などの小市民層とは異なる社会集団を形成するようになっていた。⁴⁾さらに大規模な工場で働く労働者層が生まれると市民階級の上層部は、下位集団との区別を強く意識するようになったのである。ハイムブルクは確かに市民層を主要購読者とした家庭雑誌に作品を掲載していた。しかし彼女は、マルリットが描いたような市民階級の理想は既に幻想にすぎないと感じていたのかもしれない。この論文では、『役立たず嬢』„Mamsell Unnütz“ (1893)、『ベーツェン家』„Haus Beetzen“ (1895)、『強情な心』„Trotzige Herzen“ (1897)を取り上げ、シンデレラ・モチーフ、「家族との信頼感」、「母役割」などの要素を比較・検討して、市民階級の理想の一つである「家庭像」が彼女の作品でどのように描かれているのか、その特徴を明らかにしていきたい。

なお、本論文は、2025年9月13日にゲルマニスティネンの会関西支部研究発表会で行った研究発表『ヴィルヘルミーネ・ハイムブルクが描く家庭像—1890年代の作品を中心に』に大幅に加筆修正を加えたものである。

1 19世紀の市民家庭

両親と子供からなる親密な感情で結ばれた家庭というイメージは、今日でも広く共有されているが、これは18世紀後半から19世紀を通して形成されてきたものである。ドイツの歴史家トーマス・ニッパードイ Thomas Nipperdey は近代的市民家庭を次のように定義付けている。1. 生産圏と家庭圏の分離 2. 家族の「外界」からの分離 3. 両親と子供たちからなる核家族 4. 情緒的に基礎づけられた親密な共同体としての家族 5. 近代的家父長主義。⁵⁾ この定義を元に19世紀市民階級の家庭を見ていきたい。

この時期に起きた家庭を巡る大きな変化は、何よりも職場と居住空間の分離である。1855年にヴィルヘルム・ハインリヒ・リール Wilhelm Heinrich Riehl (1823-1897)が、著書『家族』„Familie“で「全き家」(das ganze Haus)と名付けた中世以来の家では、住居と仕事場が同じで、時には多世代に渡る親族と徒弟や使用人も家の構成人として共に農作業や手工業に当たり、生産と消費がその家の中で完結していた、つまり、それぞれの家が一つの独立した経済単位として存在していた。しかし産業が近代化されるにつれ、大規模な機械や設備を設置するために専用の作業場、さらには工場が作られるようになると、仕事の間は家から分離した。さらにかつては家庭で生産加工されていた食品、衣服、家具などが購入するものになると、家からは生産機能が失われた。その結果、外に仕事に出かける夫に対して、家に残された妻はかつて担っていた経済生産機能の多くを失ったのである。⁶⁾職場という公的領域に対して、家は私的領域として「外の世界から保護してくれる避難場所」⁷⁾となった。その結果親密な愛情で結ばれた家族と過ごす平和な世界として家庭は情緒化し、ここから妻には新しい役割が生まれたのである。つまり快適で安心できる空間を確保、維持し、厳しい戦いの場である外の世界から疲れて帰ってくる夫を癒やすこと、子供をただ養育するだけ

ではなく、愛情を込めてその人間形成に尽力することである。それまでの子供は小さな大人と扱われ、ある程度成長すればすぐに労働にかり出されていた。子供が大人とは異なる存在だということが「発見」され、愛情に満ちた親子(特に母子)関係のなかで、その人格を育まなければならないという認識はこの時代に成立したものである。

このように家庭は、もはやその構成員が生産のための「役割」に規定される「経営体」ではなく、個人個人の親密な感情で結ばれて作り出される「情緒共同体」⁽⁸⁾と捉えられるようになったのだが、明らかに家父長主義的な構造を持っていた。先にも述べたとおり、家から生産という要素がなくなるにつれ、女性が家計の維持に果たす機能も減少し、その役割は快適な家庭環境を維持することに限定された。家の外で競争にさらされながら働く男性には生まれつき能動的、理性的、客観的な性質が備わっているのに対し、家庭で他の家族のために生きる女性には受動的、愛情、主観的といった性質があり、男女の役割はこの生来の性質に従って決まっているのだとされた。このような家庭での分業体制が定着すると、生計を立てる能力の無い妻は夫の保護を必要とする無力な存在となった。実際に、1794年に制定されたプロイセン一般ラント法では結婚後、法律や契約で明確に認めていない限りという留保は付いてはいるが、「女性の財産は夫の管理下に移る」(第205条)と規定されており、1900年の民法でも、1363条に同様の規定がある。⁽⁹⁾ 簡単な読み書き教育を受けた後は、家事を切り盛りするための訓練しか受けることのなかった女性には結婚以外には生きる術もなかった。このような人生の選択肢の欠如は市民階級の女性の婚姻生活における決定的な影響を及ぼしていたのである。⁽¹⁰⁾このような背景から、結婚生活を上手く維持していくために、妻は夫に依存しつつ、彼を支えることが必須だったが、それは翻って女性の不利な状況を強めることになった。そしてそれが社会を安定させることにもつながる⁽¹¹⁾という連鎖状況となったのである。

ところで、結婚生活において妻にはもう一つ別の役割も生まれてきた。経済が発展するに従って、生活に少しずつ余裕が生まれると、「身分にふさわしい」(standesgemäß)ことに対するこだわりが生まれた。これを最もよく示してくれるのが、妻が美しい衣服を身につけ、あくせくすることなく余裕のある生活ができているということだった。つまり体面の維持という役割が与えられたのである。⁽¹²⁾ 19世紀には市民家庭は最低1名の家事使用人を雇っていたという。1907年になっても女中として働いていた人口は125万人いた。⁽¹³⁾ とはいえ、家事を全て使用人に任せることのできるのはかなり裕福な層に限られ、多くの場合には主婦も多く家事労働を行っていた。息子を良い仕事に就かせるためには、最低ギムナジウム、多くは大学での教育が必要で、行政、法曹、医学などの分野で仕事をする場合、長い研修期間もあったため、そのための資金を確保するのは容易なことではなく、さらに女中を雇うとなると、妻が内職でそれを賄わなければならなかった。しかし、夫の体面を保ち、穏やかな家庭を守るためには、妻は家事労働の苦勞も内職仕事も見せてはならなかったのである。

しかし家庭の中で夫に依存し、家族のためだけに生きる生活に満足できなくても、そこか

ら抜け出る手段はなく、経済的には苦勞が多くてもそれを見せずに余裕ある生活を装うなど、市民女性の生活の理想と現実の間にある矛盾は隠せないものになっていった。市民階級を主な購読者層としていた家庭雑誌では、理想的な市民家庭を描く小説を多く掲載していた。それでは『ガルテンラウベ』の人気作家ハイムブルクはその矛盾を感じていたのだろうか。「マルリットの後継者」となった 1890 年代の作品に描かれた彼女の家庭像を検討する。

2 『役立たず嬢』 „Mamsell Unnütz“

この作品は 1892 年ガルテンラウベ 20 号から 28 号まで連載され、翌年単行本化された。昔からよく描かれてきたシンデレラ・モチーフによる虐げられてきた継子が幸せな結婚をするというストーリーである。舞台はドイツ帝国成立後のライン地方(最寄りの大都市はケルン)の小都市で、イタリア人を母に持つ主人公ユーリア(Julia)は、ドイツ人の父親の死後、父のかつての恋人だったフリーデリケに兄フリーダーと共に引き取られる。フリーデリケは恋人にそっくりの兄を溺愛するが、母親似のユーリアには冷淡だった。フリーデリケは未亡人の妹と同居していたが、その妹からは「穀潰し」として「役立たず」(Unnütz)と呼ばれ、使用人と変わらない扱いをされていた。ユーリアが 18 歳になった時、妹の息子で医者になったフリッツが帰郷する。フリッツはこの家で唯一ユーリアに優しくしてくれた人物だった。ある日、フリッツが軽い気持ちでキスをしたことで、ユーリアは自分が愛されていると思い込む。しかし、結局フリッツは裕福な隣人の娘テレゼと婚約し、ユーリアはショックで寝込んでしまう。ユーリアの兄フリーダーは、少尉として軍隊に勤務していたが、放埒な生活で借金を背負い、ユーリアやフリーデリケにお金の無心を繰り返している。テレゼの家が裕福だと分かると、彼女に言い寄り、二人は秘密裏に婚約していた。しかしテレゼの父は猛反対し、借金を肩代わりする代わりに町から出て行くようにフリーダーに求める。彼女も父の反対を押し切ってまで結婚を強行するつもりはなく、優秀な若い医師として町の注目を集め始めたフリッツを選ぶ。ユーリアはこのいきさつを知っていたが、周囲には話せず、自分が愛している男性が、密かに彼を裏切っていた女性と結婚するのをただ見ていることしかできない。もう家にいられないと思い、結婚式の前に看護師になるために家を出るつもりだったのだが、育ての親であるフリーデリケが卒中の発作を起こし身体が不自由になると、介護に専念させられる。2 年後、フリーダーが突如東アフリカから現地人とトラブルを起こしけがをしたため帰ってくる。東アフリカの体験談を語るフリーダーはすぐに小さな町のスターになり、テレゼは再びフリーダーと密会を重ねるようになる。そんな中テレゼの不注意でフリッツとの息子が溺死すると、テレゼはフリーダーと駆け落ちする。3 年後にフリーデリケが死ぬと、ユーリアは家を出ることにするが、フリッツは突然、ずっとそばにいたユーリアが自分には必要な存在だったのだと気づき、結婚を申し込むところで物語は終わる。

ウルズラ・ボンター Urszula Bonter も指摘しているが、この作品にはマルリットの『老お嬢様の秘密』 „Das Geheimnis der alten Mamsell“ (1867) と多くの類似点がある。⁽¹⁴⁾ま

ず、主人公が孤児となり、血縁関係にない家庭に引き取られたこと、マルリットの主人公がポーランド人の旅芸人の娘、ハイムブルクのユーリアがイタリア人を母に持つなど、どちらもドイツの伝統的な市民家庭とは異質な出自を持っていること、どちらも引き取られた家の息子と結ばれ、その人物はどちらも医者であること、彼の仕事を熱心に手伝い、信頼を得ること、危険を顧みず子供を救おうとしたことである。この共通点の多さから、恐らくハイムブルクはマルリットを意識して作品を書いたのだらうと推測されるが、その相違点に注目するとハイムブルクの特徴がよく見て取れる。

まず、主人公の年齢は18歳と同じだが、その性格付けは大きく異なる。マルリットの主人公は理不尽な扱い、特にあらゆる知的・精神的活動を禁じられたことに対して、毅然と抗議する。

あなたが私を意思のない、奉仕する機械にしようとなさったこと、そして私の中の精神的要素を完全に破壊しようとしたこと、[...]これが、私があなただけの仕打ちで忘れることができないことなのです！⁽¹⁵⁾

それに対してユーリアはドイツに引き取られた幼児の頃こそ、与えられた古いおもちゃが気に入らずたたき壊すような激しい性格が描かれるが、その後は周囲の冷たい環境の中で、屋根裏部屋で黙って拳を握りしめることしかできない。しかし当然のことながら彼女は自分に対する愛情を持たない人間に対して、愛情を示すことはない。自分を引き取ったフリーデリケに対しては感謝しつつも、全く愛情を感じることはなく黙々と介護をしている。フリーデリケはそのことについてフリッツに「あの娘は何でも誠実にするけど、まるで東洋の王様の奴隷みたいに堅苦しくてだんまりなのよ。一親しみのかけらもないし[...]愛情が全くないの」(Bd. 1 S. 221)と愚痴を言う。それに対してフリッツは「伯母さんは愛情を収穫したいのか。彼女の心に愛の種を蒔かなかったのに」(Bd. 1 S. 221)と答える。ハイムブルクの作品では、主人公の女性はただ自分の義務を果たし、余計なことを考える暇を作らないことで、つらい状況を耐えようとする。先に述べたマルリットの主人公と比べると、考えることを放棄したような受動的態度には明らかに自由や自律という理想に対する無力感が表われている。物語の最後によりやく思い続けてきたフリッツと結ばれる場面でも、苦しみを続けてきた主人公と幼い息子の死からよりやく立ち直りつつあるフリッツから感じられるのは、結ばれたカップルの喜びよりむしろ安堵感である。その意味では、外の世界から守られた平穏な家庭という市民階級の家庭が実現するということなのだろう。ユーリアを「役立たず」と呼んできたフリッツの母親ももはや結婚に反対はしない。しかし彼女のつぶやき、「よく見ると、これが一番簡単な解決法ね。もちろんそんなことを思いつかない方が良かったんだけど。—うーん。でも素晴らしいことでもあるわね。[...]一つのことは本当に違くないわ。彼女はおとなしい、とてもおとなしいし、彼を愛しているし—それから—」(Bd.1 S. 320)は、この結婚は物事が収まる場所に収まっただけだという作者の醒めた視線が隠れている。

結婚は愛情に基づくという 19 世紀に定着した結婚観をなぞりながらも、その中身には既に新鮮さが失われているのである。

3 『ベーツェン家』 „Haus Beetzen“

次に二つ目の作品『ベーツェン家』を紹介したい。この作品は 1895 年第 14 号から 29 号まで掲載され、同年単行本になった作品である。舞台は現代のポーランドとの国境に近い東エルベのユンカーの家である。主人公ディーチャ (Dietscha 本名 Sophie) は出産時に母親が死んでしまったため、伯父夫婦に預けられる。この伯父夫婦は事故で息子を亡くした悲しみからディーチャに構うことなく、彼女をただ放置する。同居するキリスト教伝道会に傾倒する叔母の影響もあり、この家では娯楽も気晴らしも全く存在しない。屋敷の図書室の本を読むことだけがディーチャの楽しみだったのだが、それすらある日、世俗的な本があるとの理由で、閉鎖されてしまう。ある日、近隣の町の行政官見習いフォン・ペルツィエンが挨拶にやってくる。彼は自分の放蕩のせいで領地の維持が難しいほどの状態になっており、経済的に問題の無いベーツェンの遺産相続人となるディーチャとの結婚をもくろむ。彼女に取り入れるため、彼は自分の放蕩を告白し、立ち直る助けをして欲しいと懇願する。愛情に飢え、人から必要とされたいと望んでいた彼女は、彼を救うことが自分の使命だと信じて結婚を承諾する。しかし彼が問題のある人物であることを知っている伯父は結婚を認めない。二人はクリスマスイブに駆け落ちすることを計画するが、ディーチャに弟が生まれ、彼女が領地を相続できないことを偶然知ったペルツィエンは待ち合わせ場所に現れず、彼女は伯父に連れ戻される。6 年後、普仏戦争で父親が戦死し、未亡人となった若い継母が幼い弟と共にベーツェンに移り住む。同じ時期、近隣の騎士領を購入したクルト・ローテがディーチャを気に入り、結婚を申し込む。彼は市民階級だが、信頼の置ける人柄は伯父も気に入り、結婚に賛成する。彼女も誠実なこの男性と結婚したいと思うが、駆け落ち未遂事件という過去を彼が赦せるのかと悩む。自分では打ち明けられず、伯父に話して欲しいと言うが、伯父は「結婚すればなんとかなる」と考え、ローテには黙っている。結婚が決まると、かつて駆け落ちの手引きをしたグレーテと言う女性がやって来て、ディーチャから金を脅し取る。伯父がローテに話していないことを知った彼女は悩みながらも告白の手紙を書く。ローテは恋愛について非常に厳格な道德観を持っており、ディーチャの過ちを赦すことができず、婚約は解消される。同じ時期に継母が結婚前からの恋仲だった人物と再婚することになり、ディーチャは幼い弟の母親代わりとなり愛情を持って育てる。1889 年、ディーチャが 42 歳の時に、弟アヒムはドレスデンの実母を訪ねた際に、美しいアメリカ人女性を見初める。彼女に会って欲しいと頼まれ、ディーチャはドレスデンに行くが、この女性の母親がグレーテであると知る。また脅されそうになった彼女はアヒムにこの女性はふさわしくないと言うが、なぜなのかを説明できない。彼は悩みながらも、別れを告げにこの女性のところに行くが、彼女の養父はフォン・ペルツィエンで、彼から過去のいきさつを聞かされたアヒムは姉を侮

辱されたとして決闘を挑み、重傷を負う。駆けつけたディーチャはアヒムから拒絶的な態度を取られ、ショックを受ける。その後けがも回復したアヒムは別の女性と婚約し、ペーツェンに戻ってくるが、その朝にディーチャは「私にはもう幸せになる力が無いわ、疲れた、死ぬほど疲れたの」(Bd.4 S. 320)と言い残して死んでしまう。最後を看取ったローテに彼女はようやく全てを話し、彼は彼女が自分をどんなに愛していたのかを知るが、全ては遅すぎたのである。

このように救いのない小説だが、ディーチャの不幸の原因は、人から必要とされたいと願いながら、家族の誰からも愛情をもらえず育った孤独と、他者と話し合いが成立しないというコミュニケーションの欠如である。彼女はペルツィエンを「言い様もないくらいどうでも良い(namenlos gleichgültig)と感じていた」(Bd. 4 S. 46)が、自分は「彼を更生させられる、だって自分が見ていれば彼にはもっと良い、もっと聖なる世界が開かれるのだから」(Bd.3 S. 45)という世間知らずな善意を利用される。そして家族の誰もが婚約話を無かったこととして、彼女ときちんと向き合わずに済ました結果、駆け落ち未遂にまで発展してしまったのである。真剣に結婚を望んだローテに対しては、彼女は自分で話す勇気が持てず、伯父に任せた結果、潔癖なローテから拒絶されてしまう。彼に書いた手紙には、ペルツィエンに対して抱いていた感情などの詳しい事情説明はなかった。最後に全てを話したときようやく、ローテは「この世に純粋な心があるといえるのは彼女のような人だ」(Bd.4 S. 320)と分かるのである。重傷を負ったアヒムに対しても、彼女はやはりきちんと説明することができず、その結果彼から拒絶されたと思い、絶望する。19世紀の市民階級が、厳しい世界からの避難場所としたはずの「家庭」、その家庭を共に築くはずの人間とコミュニケーションを重ねて関係性を築くことができない主人公の不幸からは、ハイムブルクにとって19世紀市民の「家庭」の理想像が既に空疎なものになっていたということが伺われる。

ところで、ディーチャはユンカーの娘だが、市民階級のローテとの結婚話には大きな障害は起きなかった。叔母の一人が身分差を持ち出したとき、ディーチャとほぼ同い年の継母は次のように言う。

彼がただのローテという名前だったとしても、多くの人は喜んで彼を選ぶでしょう。あなたは本当に中世に染まっていらっしゃるのね、アンナーあなたは最新の研究で、いわゆる精神的貴族の方が生まれながらの貴族に勝っているのだということをお聞きになったことはないのかしら？[···]新しい時代の新鮮で厳しい風は私たち貴族のオリンポスから雲を吹き払って[···] (Bd.4 S.169)

1868年の法律改正により、異なる身分間での婚姻は解禁された。⁽¹⁶⁾王族、公爵などの高位貴族の場合は身分の同等性(Ebenbürtigkeit)が重視されたが、低位貴族であれば、経済的に困窮する貴族と裕福なブルジョワとの結婚は珍しいことではなくなっていた。そのような結婚に対して心理的な抵抗感が残っていたが、ヴィルヘルム時代にはドイツの極めて裕福

なブルジョワ 500 人のうち、息子の 24%、娘の 32%が「産業化以前の上層」（貴族、大地所有者、士官など）と結婚していた。⁽¹⁷⁾ ハイムブルクの作品でも、このような結婚がしばしば描かれている。1878 年発表の『ぼろ切れ水車のリースヒェン』„Lumpenmüllers Lieschen“では、貴族男性の祖母が市民階級の主人公との結婚に猛反対し、最後はそのような関係を拒否して、家を出てしまう。しかし 1886 年の『もう一人の女』„Die Andere“では、貴族女性と市民男性の結婚に反対する人間はおらず、主人公は結婚によってようやく幸せな家庭を築くことができ、身分違いの結婚は非常に肯定的に描かれている。『ベーツェン家』でも、ローテとの結婚が実現しなかったのは、身分差ではなく、ディーチャの過ちをローテが赦せなかったためである。ここでは、自然な人間の心情を押しつぶす市民階級のあまりに厳格な道徳観も批判的に描かれているのである。

4 『強情な心』 „Trotzige Herzen“

三つ目の作品『強情な心』は、1897 年第 1 号から 20 号まで連載され、同年単行本として全集に収められた作品である。子供の頃から親しく過ごし、両思いだと確信できた途端に、困窮していた男性の方が遺産を相続した別の女性と結婚することになり、腹を立てた主人公も別の男性と婚約、その後紆余曲折を経て、二人が結ばれるまでを描いている。主人公のエンネは 19 歳で、医療顧問官の娘である。父親は領主の母親の侍医を勤めているが、名誉ある職にもかかわらず、給金はあまり良くなく、軍人と学生の息子二人も抱えて、一家は決して裕福とは言えない生活をしている。エンネは城の警護をしているハインツ・フォン・ケルコーと思いが通じ合えたと思ひ、胸をときめかせるが、早くに父親を亡くしたハインツの家は貧しく、妹の一人はお相手役としてベルリンで働き、もう一人と母親は小さな町で、内職で何とか糊口をしのいでいる状態である。ところがベルリンにいた妹が精神に異常を来して、施設に收容されることになり、経済的に行き詰まったハインツは、最近遺産を相続したという宮廷女官のトーニに結婚を申し込む。財産目当てだということは誰の目にも明らかで、本人もそれをはっきり認めている。

「あなたはお金のためだけに彼女にするつもりなの、ハインツ？ちなみに彼女はあなたにとって全くどうでも良い人なの？」彼女は少なくとも何かしらの弁解を彼から聞き出そうとした。

しかし彼はそれには応じなかった。彼は短く言った。「そうだよ。そんなことを聞かないでくれよ、叔母さん。私は金のためだけに彼女にするんだ。彼女が是が非でも夫をほしいから、多分私にしたようにね。首都やここでもすっかり有名なことだよ。」(Bd.5 S.44)

一方ハインツの婚約の知らせを聞いたエンネはプライドを傷つけられ、自分が彼を愛し

たことはないとするために、3人の子持ちの上級林務官と婚約する。腹いせだけに結んだ関係がうまくいくはずもなく、彼女は子供たちに親しみを感じることはないし、子供たちも彼女にはなつかない。ハインツに対して子供たちとの仲の良さをアピールしようとしたエンネに対して子供たちはそれが振りに過ぎないことを暴露する。

「どうして今日はマリーに何度もキスをするの？」

エンネの顔はぎょっとして赤くなった。彼女は厳しく尋ねた。「どういうこと、ヘルマン、私、毎日マリーにキスしてるじゃないの」

少年は叫んだ。「本当じゃないよ！あの子が膝の上に座ろうとしたら、いつも床に下ろすじゃないか」

「しつけの悪い子ね、ヘルマン！アグネス、弟を連れて出て行ってちょうだい！」彼女は大声で言った。(Bd. 5 S. 96)

子供に対して愛情を感じることができるかということは、マルリットにおいては女性登場人物を描く際、非常に重要な点だった。ネガティブな人物はしばしば子供に関心が無かったり、冷淡な態度を取るのに対して、主人公は子供を見た瞬間に愛情を感じるし、子供からも信頼される。これは、将来「母親」という市民女性の重要な役割を果たすことができるかという試金石になっているのである。

既に述べた通り、近代市民階級においては住居と職場が切り離され、家庭は外の労働から疲れて帰ってくる夫に安らぎを与える場となった。さらに食料、衣服、家具など様々なものが家庭で生産されるのではなく、購入されるものになった結果、妻はかつての生産の担い手としての役割を失い、外の「公領域」に対して「私領域」の家の中で夫に従属する立場となった。その中で家庭を守り、子供を養育する「母役割」が重要な女性の任務としてクローズアップされていく。次世代の社会ひいては国家を担う人間を正しく育てることは、失われた女性の生産役割を補填するものと捉えることもできるが、我が子を温かい愛情で包み保護、育成するという「母親」の資質は、家庭に留まらず、社会でも必要であるという考えが19世紀半ばには生まれていた。幼稚園の父フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル Friedrich Wilhelm August Fröbel の弟子ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマン Henriette Schrader-Breyman は1860年に、母親が家庭内で果たしている役割は、子供たちの教育のために社会の中でそのまま役立てることができるし、そのような「母役割」は自分の子供でなくても、子供を産んでいなくても、担うことができるのだという考えに到り、それを自分の子供を産み育てるという「身体的母性」と区別して「精神的母性」と呼んだ。これは男性にはできない、女性だけに備わった能力だとして、女性の社会進出を求めた19世紀末以降のヘレーネ・ランゲらの活動につながっていく。⁽¹⁸⁾マルリットは直接的にこのような思想に関わることはなかったが、明らかに同じ潮流の中にいるように思われる。病気の子供の看病や身を挺して子供を救う主人公の行動はどの作品にも必ず描かれ、主人公がこ

のような「母役割」を担えることが示されるのである。そしてこれらのエピソードは男性が主人公に関心を持つきっかけとなっている。

ハイムブルクの場合はどうだろうか。エンネは子供たちと結局良い関係は築けなかったが、むしろエンネの婚約の動機が当てつけに過ぎないことを知っている読者には、当然の結果だと映るはずである。ただハイムブルクは淡々と場面を描写するだけで、決してそれを否定的には描いていない。エンネに母性があるかどうかはあまり大きな問題にはなっていないように見えるのである。彼女は確かに数年後、体が不自由なハインツの息子を見かけて、涙ぐんだり、病状が悪化したその子供の手術の助手を務めて、一晩懸命に看護したりする。しかし、作者の関心はむしろ、エンネの母性より、ハインツとの関係の変化に向けられている。エンネが愛していない男性とは結婚できないと婚約解消したのに対し、ハインツは結婚はしたが、妻の相続財産は、管理していた親戚により投資に回された結果、ほぼ全てが失われてしまっていた。財産がなくなった途端に、結婚を止めるわけにも行かず結婚したというような状況で、夫婦仲は始めから冷め切っていた。結局妻は若い士官とアメリカに駆け落ちする。ハインツは周囲からも眉をひそめられるほど、無気力で投げやりで過ごし、ただ体の不自由な息子のためだけに生きていた。その子供が手術の甲斐無く死んでしまったとき、彼は生きている意味も無いと自殺しようとするのだが、エンネがピストルを取り上げて、一喝するのである。「ハインツ・ケルコー、あなたいつから臆病者になったの？」(Bd. 5 S. 402)さらに彼女は次のように言う。

ケルコーさん、私はあなたのものになれないわ。私自身弱くて自分を支えて欲しい強い腕が必要な。私が今あなたにぶら下がっても絶望的な旅になるでしょう。でも、もしいつかどんな立場でだったとしても、自分の足で立つ働く男として、また来てくれるなら、あなたについて行きます。—そのときまでさようなら！(Bd. 5 S. 407-408)

このときエンネは自分から結婚を申し込んでいるのである。この作品では、エンネは当てつけに婚約したものの、悩みつつも最終的には自分の誤りを認めて、婚約解消する。その後、元々歌が上手かったこともあり、本格的に歌の教育を受けたいと両親の反対を押し切って、ドレスデンに行き、歌手になる。それに対してハインツは打算から結婚するものの、人生が上手くいかないことを嘆き、無気力になる。最終的にはエンネに一喝された後、作家になって、彼女に著作を送り、自分が立ち直ったことを伝えるのである。ここでは、主人公の意思力と相手の男性の弱さが際立っている。最後には母親に結婚を伝えるのだが、ここでは既に結婚の許可を求めることもなく、ただ報告するのみである。1868年のラント法改正で、成人していれば親の許可が無くても結婚は可能になっていたが、反対する母親に有無を言わさないところに、自活している人間の強さが表われている。小説の最後は、仕事をしているのかと問うエンネの母親に対してハインツが「働けるんです」(Ich kann arbeiten.) (Bd. 5 S. 422)と答えている。自身の仕事によって自立した生活をするという伝統的市民階級の理想

が表われているとも考えられる。19世紀も末になると、この理想は既に幻想に過ぎないことが明らかになっていた。市民階級とは経営者、高級官僚、弁護士・医者などの大学教育を受けた自営・自由業従事者を指すようになり、職人・個人商店主などは中小市民という別の階級と捉えられるようになっていた。労働を尊ぶ姿勢はこの中小市民にはまだ残っていたが、彼らと先に述べた市民層はもはや同じ階級とはいえなかった。ハイムブルクは、貴族であるハインツに「働ける」と言わせることで、この理想をまだ掲げていたのだろう。もっとも彼女は作家が自立していける職業かという問題には踏み込んでいない。それは、歌手になって成功を収めたというエンネに関しても同じである。これは、ハイムブルクやマルリットの限界と言っても良いのかもしれない。

ところで、この小説には現代にも通じるもう一つの問題が提起されている。エンネの父親が死んだとき、母親には領主から家に住み続ける許可が与えられたが、年老いた母親を一人にはできないという問題が起きた。このとき兄二人は当然のようにエンネに歌手を辞めて故郷に帰り、母親の面倒を見ることを求め、母親もそれが当然と考えていた。エンネはそれに対し、自分にも仕事があり、男性と同じように仕事に対する義務があると言うが、一顧だにされない。

でも、私には仕事があるのよ、お母さん。人生の何年も捧げて、自分の生計を立てて、幸せにしてくれる、男の人と同じように義務で結ばれた仕事。」[…]

試補見習いは咳払いした。「つまり、おまえは我々家族の生活をぶち壊す女性運動家の一人になったと言うわけだな」 (Bd. 5 S. 331-332)

それに対しては叔母がはっきりと反論している。

そもそも結婚していないからと言って、女の子はわがままな母親と優しいお兄さんたちにとって都合が良い所に押し込むのに丁度良いの？[…]あなたたちは彼女が仕事を愛しているとは思わないの？芸術に対してこんなに理解も敬意もないの？ (Bd. 5 S. 332-333)

ところで、作品の最後にはエンネはあっさりこの仕事を辞めることにする。

私がどんなに好きでしていたとしても、彼は私を働かせたりはしないわ！お母さんが私にそうなって欲しいと思っていたように、彼の妻以上のものにはならないの。そして私が歌うとしたら、私と彼の特別な楽しみのためだけになのよ。(Bd. 5 S. 421)

この言葉と、それまで仕事が大切だと主張していたことには確かに矛盾が感じられる。ただ、このような紋切り型の結末は作品全体にはあまり重要ではないかもしれない。なぜなら物

語が完結した状態で受容される書籍とは違い、連載小説の場合には 1 週間ごとに細分化されて掲載されるため、物語の各部分はそれぞれが高い独立性を持ち、その結果、その一話一話が強い印象を読者に喚起する可能性があるからである。⁽¹⁹⁾これはさらにセリフの一つ一つにも当てはまるかもしれない。作品の最後でお決まりの結末を迎えることで、掲載された雑誌の規範に抵触していないという安心感を与えながら、その間にある言葉にそれとは相容れない価値観が示されているとは言えないだろうか。そして実はそのような新しい価値観を受け入れていた読者もいたという推測も可能だと思われる。

終わりに

ハイムブルク自身の日記や手紙がもう存在していないので、実際彼女が『ガルテンラウベ』に代表される 19 世紀市民階級の価値観をどのように捉えていたのかは分からない。ただ、作品の外枠は市民階級の理想に基づいた結末を持っていたとしても、その中にはその有効性を失いつつある市民階級の精神的状況が見え隠れしているように思われるのである。今後は 20 世紀に入ってから彼女の作品と並んで、同時代の他の作家たちとの比較を通して、ハイムブルク作品に描かれたヴィルヘルム時代の社会像を明らかにしていきたい。

本研究は科学研究費助成事業・基盤研究 C「ドイツ帝政期の女性作家による娯楽文学の諸相」(23K00434)の助成を受けたものです。(研究代表者：横山香、研究分担者：竹田和子)

注

ハイムブルクの作品は W. Heimburgs illustrierte Romane und Novellen. Neue Folge. Bd.1 „Mamsell Unnütz“, Bd.4 „Haus Beetzen“, Bd.5 „Trotzige Herzen“. Leipzig, o.J.から引用し、文中では巻数とページ数のみを括弧内に示した。

- (1) Vgl. Georg Jäger (Hg.): Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. Und 20. Jahrhundert. Bd.1: Das Kaiserreich1871-1918. Teil 2. Frankfurt a.M., 2003. S.427.
- (2) Vgl. Urszula Bonter: Der Populärroman in der Nachfolge von E. Marlitt. Wilhelmine Heimburg, Valeska Gräfin Bethusy-Huc, Eufemia von Adlersfeld-Ballestrem. Königshausen & Neumann, 2005. S. 76-78. 拙論「E・マルリットの『後継者』としてのヴィルヘルミーネ・ハイムブルク」ゲルマニスティネンの会編『フラッシュェンポスト』第 46 号、2025 年、1-5 頁参照。
- (3) マルリットに関しても晩年の作品では、この理想を担うはずだった市民階級のあり方に対する疑念が表われるようになっている。拙論：「E.マルリット作品に描かれた『家』の崩壊とその社会的背景—『商業顧問官の家』と『石榴石の髪飾りの女』を中心に—」

阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第 61 号、2019 年、18-20 頁参照。

- (4) Vgl. Jürgen Kocka (Hg.): Bürgertum im 19. Jahrhundert (Kleine Vandenhoeck-Reihe 1573) Bd. 1: Einheit und Vielfalt Europas. Göttingen, 1995. S. 14f.
- (5) トーマス・ニッパード著 大内宏一訳:『ドイツ史 1866-1918 労働世界と市民精神上』白水社、2022 年、61-62 頁参照。
- (6) インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン著 鳥光美緒子訳:『ドイツの家族 古代ゲルマンから現代』勁草書房、1991 年 106-109 頁参照。公共的世界としての社会に対立する私的世界としての家庭については以下の文献も参照した。Heidi Rosenbaum: Formen der Familie. Untersuchungen zum Zusammenhang von Familienverhältnissen, Sozialstruktur und sozialem Wandel in der deutschen Gesellschaft des 19. Jahrhunderts. (Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft 374) Frankfurt a.M., 1982. S. 373-378.
- (7) William H. Hubbard: Familiengeschichte. Materialien zur deutschen Familie seit dem Ende des 19. Jahrhunderts. München, 1983. S.23.
- (8) 姫岡とし子: 「啓蒙の世紀」若尾雄二、井上茂子編著『近代ドイツの歴史』第 I 部第 2 章 ミネルヴァ書房 2005 年 41 頁。
- (9) Zit. nach Hubbard, a.a.O., S. 50, S. 52.
- (10) Vgl. Rosenbaum, S. 340.
- (11) Vgl. ed., S. 347.
- (12) Vgl. ed., S. 342.
- (13) トーマス・ニッパード前掲書、68-69 頁参照。
- (14) Vgl. Bonter, a. a. O., S.109.
- (15) E. Marlitt: „Das Geheimnis der alten Mamsell“. E. Marlitts gesammelte Romane und Novellen. Bd. 1. S. 131. Leipzig, o.J.
- (16) 第 1 条 「連邦国民は婚姻締結あるいはそれと結びついた自らの世帯形成のためには、財産も地方自治体構成員(地方自治体住民資格)取得または居住権も自治体(領主)または救貧団体の認可も当局の許可も必要としない」 Zit. Nach Hubbard, a.a.O., S. 48. また 41 頁も参照。
- (17) Vgl. Kocka, a.a.O., S.47.
- (18) 姫岡とし子:『近代ドイツの母性主義フェミニズム』、勁草書房 1993 年、22 頁、25 頁参照。
- (19) 西尾宇広:「母親たちの女性解放—19 世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌」吉田耕太郎、西尾宇広、福岡麻子、藤原美沙編:『フィクションとしての家族』156-158 頁参照。

大阪音楽大学におけるイタリア語学修と伊和辞典についての論考 —辞書を使うことは必要か否か?—

谷口 真生子

1. はじめに — 考察への動機

本稿は、伊和辞典とイタリア語学修⁽¹⁾のこと、伊和辞典がどのようにイタリア語習得に関わるものであるかを考察していくものであるが、筆者の伊和辞典への想いも絡めて綴ることとする。

外国語学習には辞書が必携であるというのが当然のものと筆者は考えて現在に至ってきた。辞書無くして、外国語学習を進めていくことは不可能であると筆者はずっと思っていた。ところが、最近辞書を使わずに本学でイタリア語の授業を受ける学生たちがいる。筆者は4月の授業開始時に、日本国内で容易く入手できるイタリア語の辞書（伊和辞典）についてを紹介し、辞書を使用するようにしているものの、別の担当教員によるイタリア語の授業では辞書を持たなくても受講できるような授業が進められていた。その教員に辞書をなぜ持たせないのかと質問したことがあるが、「辞書を引かせることが授業ではない」と言われた。啞然としながらもその通りであるかもしれないとも思った。授業中に辞書を相手に学生が戸惑い手間取って色々と時間を取らせることを考えると、効率的に授業を行うには辞書は授業準備の段階で調べておくほうが良いと筆者も思う。しかし、授業時に辞書を使わずに授業を行っていた教員は、授業前に辞書で調べておくようにという指示していなかったようで、恐らく単語や熟語の意味をその教員が学生に伝えながら、学生に辞書や参考書で予習をさせないままに授業を進めていったようであった。

イタリア語は英文法に比べると、冠詞、名詞、形容詞の変化や動詞の活用形が複雑なものになっている。動詞については簡単に覚えることは到底できない。また、辞書があっても、その使い方がわからなければ辞書を持たせるには意味がないと筆者は思っている。これから先の世の中、AIの能力がめざましい進歩を遂げていくなか、辞書を使って苦勞することなく、イタリア語の習得が可能となっていくのかもしれないが、現在のところは、やはり辞書が必要であると思う、そう願いたい。イタリア語学習には辞書が必要であると説得できるような論を展開し、かつ、本学のイタリア語の授業で辞書を使用する意義について本稿で論じていきたい。

2. 本学のイタリア語の授業について

2-1. 必修単位数の見直しと今後の影響

本学の外国語の卒業単位数については既に本学の紀要論集で述べたが⁽²⁾、カリキュラムの

見直しを経て、2026年度から本学の外国語の卒業単位数は現行からさらに削られることとなる。これは文部科学省が行なった1991年の大綱化のため、科目別の必要単位数の規定が撤廃され、必要単位数の縛りが無い分、自由に各大学が単位数を設定でき、本学が外国語科目の見直しをしたためである。外国語の卒業のための卒業要件単位数は2026年度入学生から、大学が6単位、短期大学部が2単位ということになる。短期大学部は現行のままであるが、4年制の大学では、1年次に文法を週1コマ、コミュニケーション系のクラスを週に1コマで、1 Semester 2単位で、前期と後期を合わせて4単位、2年次になって文法クラスが週に1コマで2 Semester分の単位で学習するということとなる。文法と会話系の1コマずつで1年目は週に2回外国語と親しむ機会を学生が持つが、2年目ではコミュニケーション系の学習は、選択科目となり、必修としては週1回の外国語学習が続くわけである。イタリア語の文法学修のために週1コマずつの2年間合計60回の授業数という計算となる。文法の授業が2年間で総数60回というのは現行と変わらない状況ではあるが、コミュニケーション系の授業のB1~BIVのうちのBIIIとBIVが廃止され、BIとBIIの2コマのみとなってしまうのは、必修科目としてのイタリア語に触れる時間数が減ってしまうことになる。現在以上に物足りない状態でイタリア語の履修を終えてしまうことになることが、イタリア語を教える側としては残念なことである。短期大学部のイタリア語履修については変更がなく、必修科目のイタリア語は文法を中心とするイタリア語aI・aIIの1年間で週1コマの前期と後期で合わせて30回である^③。

2026年度からのカリキュラム編成に際してまず初めに大学側（教務）から提案された^④コマ数は、各2単位の講義科目として前期AIと後期AIIの文法、コミュニケーション系の前期BI後期BIIは演習科目でそれぞれ1単位で残し、つまり1年次のみで前期週2回3単位、後期週2回3単位の合計6単位で必修外国語科目を終了させるというものであった。講義科目は1コマ2単位であるため、短期間に単位を効率良く取得させるという配慮からのことであろうが、1年間教員が一方通行で文法説明を話し続ける講義科目というのは語学学習上好ましくないことであることを、教務との話し合いで説明して、講義ではなく演習のままのカリキュラム編成ということになった。外国語科目が実践なしの、学生が座って聞いているだけの講義で済ませられる種類のものだと考えられていたとは少々驚いたが、文部科学省が例の大綱化で外国語科目については各大学の自由にして良いという決定をしてしまったため、仕方がないことかもしれないが、音楽大学では音楽系の科目の学習を重んじることが当然のことであろう。

2026年度入学生からのイタリア語学修については、文法科目の授業回数は据え置きだが、コミュニケーション系のBIII・BIV科目や、従来の選択科目のイタリア語コミュニケーションA・Bの廃止^⑤に伴って、少々習熟度が落ちるものと想像してしまうが、文法の基礎を固めることでコミュニケーションとしての会話力の基礎を養えるはずであるので、学生の学習意欲に期待をするばかりである。短期大学部については現状維持をしていくことで何も変わらない。

2-2. 授業で使用する教材その他

イタリア語の教科書は英語に比べるとその種類は少ない。教科書を変えずに何年も使用すると、再履修者は練習問題の解答を既に知っていたり、専攻の先輩が後輩に解答を渡してしまったりするという弊害がある。授業で使いやすい、つまり学生が理解しやすく教えやすい教科書は出来たら変えたくないため、筆者は自作の練習問題を授業で使用している。教員にとっては授業準備で負担増になるが、既に解答がわかっている学生たちが授業に飽きてしまうよりも、これなら解答が出回ることなく、学生が解答を知らずに問題に取り組むことができる。

イタリア語は英語に比べて学ばなければならない文法事項が多いため、イタリア語の基礎文法を修了するには2年間を要する。大綱化の後、1年間でイタリア語文法を学修できるように簡略化した構成にして、教えるのが億劫になりそうな難しい文法事項は教科書の巻末に数ページ分を補足した教科書が定番化しているように思われる。本学の学部の授業で使用する教科書については、習わねばならない文法を網羅しているような教科書を選定してきた⁶⁾。そのため、1年間では到底終了できないので2年間で教科書を終了するように授業計画を考えてきた。なお、本学のドイツ語学修では1年半で教科書を終了し、残りの半年で別のテキストを使用しているとのことである。

筆者は毎回、家庭学習用に教科書の練習問題や配布する練習問題のプリントをするように指示するか、もしくは中途半端なところで授業終了時間となる場合は次回に進む部分を示し、その項目を予習してくるように指示している。課題プリントを渡し、取り組んで次回に提出するように指示する場合も多い。宿題や課題に取り組むには辞書が必要であると筆者は考えているのではあるが、同時に、電子機器を通じてAIから解答を得るという危惧すべき状況にもなる。筆者はAIに頼ることのできないような問題、かつ電子機器を使って調べるとしても時間と手間がかかり、学生にとってそれを通じて何らかの学習成果を得ることができるような問題を作成しようと考えている。

学部のイタリア語の授業では、4月の年度開始の1週目に、現在出版されている伊和辞典について紹介し、早いうちに伊和辞典を授業のために揃えておくように学生に説明している。和伊辞典も販売されているが、和伊辞典までは必要ないことを付け加えている。和伊辞典は主にイタリア語の作文の際や、単語や熟語を探すのに必要なものであるが、教科書を中心として学習する場合は和伊辞典までは必要としないからである。

さらに、授業には教科書と辞書を必要とするが、自分自身のノートを作成するように勧められている。教科書に書き込みという作業も学生によっては、学習には有効な手段であるかもしれないが、思考や文法の自分なりのまとめをしてもらいたいので、ノートを作るように勧められているのである。決して強制ではない。練習問題と自分の解答をノートに書いて朱入れをしたり、配布プリントを貼り付けたり、自分で既にまとめた文法事項を授業中に読み返したり探したりする学生もおり、学生なりに文法を楽しんでいる場面に出くわすと嬉しくなる。

2-3. 伊和辞典と本学のイタリア語受講生

授業で使用する伊和辞典であるが、旅行会話用の手軽なものや、スマートフォンを使って無料で検索ができるようなものは使わないように指示している。2年間でしっかりとイタリア語文法を教えることが可能である学部の場合は、辞書を揃えるように教室で指示をするが、短期大学部では無理強いをしなかった。昨年度の a I または a II で単位を取得できなかった再履修の 2 年生が伊和辞典を持っていないこともあったが、短期大学の学生は必修で 1 年間という学習期間であるため、2025 年度に短期大学部の文法クラスを担当した筆者は強くは伊和辞典を薦めてこなかった。短期大学部では必修科目のイタリア語 a I ・ a II を長く非常勤講師が担当し、筆者は 2024 年度までの数年間、コミュニケーション系の選択科目のイタリア語 b I ・ b II を担当してきた。イタリア語 a I ・ a II の受講者数は毎年 20 人ほどであるが、そのうちの数人が教職課程の単位に必要であったり、時間割の余裕があれば卒業までの単位を取っておくという目的で、またはイタリア語に純粹に関心を持ってイタリア語 b I ・ b II を受講している。

実際、筆者がこの数年間担当したイタリア語 b I ・ b II の受講者で、声楽専攻の短大生が恐らく声楽の先生の意見に従って伊和辞典を所持していることがあったが、ほぼ全員が辞書を持っていなかった。教科書で扱っている簡単な会話表現だけを教えるようなことをしなくなかった筆者は、担当するその短期大学部のイタリア語の授業の際に、研究室に置いてある 4、5 種類の伊和辞典を毎回教室に持って行き、学生たちに配って授業中の資料とした。未知のイタリア語の調べ方を知り、教科書に出ている単語や熟語を辞書で参照するという作業をして欲しかったためである。イタリア語 b I ・ b II はコミュニケーション系のクラスで文法ばかりを学習するクラスではなかったので、学生たちは面食らったことであろうが、教員から単語や慣用句や動詞の変化などを親切に示してもらいつつ学習するというのではなく、イタリア語の文法を習いつつ、辞書の使い方を知って今後のイタリア語学習やイタリア語に触れていく応用力をつけることが大切であると筆者は常に思っている。

イタリア語学修のためには伊和辞典が必要であることについては後述する。その前に、先人たちの思いがこもった伊和辞典の誕生と歴史について述べていくことにする。

3. 伊和辞典の変遷と進化

3-1. 新伊和辞典

『新伊和辞典』より以前は、伊和辞典はほぼなかった。伊和辞典が無い頃のイタリア語を専攻とする学生たちや、その学生たちを指導する教員や、イタリア関連の日本人研究者の苦勞と努力は、現在から見ると計り知れないものであっただろう。東京外国語大学文書館 TUFSS Archives の東京外国語大学史のイタリア語の項の東京外国語大学発足以降（1949 年から 1956 年）の記述で、「巷間にイタリア語文献はほとんど見い出せず、いわゆる伊和辞典は存在しなかった。たとえあっても、単語帳もしくは簡単な語彙集の域を出ないもので

あった。(7)」とある。

野上素一⁽⁸⁾が『新伊和辞典』の序で新伊和辞典の誕生までを述べていることを以下に要約する。

当時の日本には伊和辞典が一つもなく、伊英、伊仏、伊独などの辞典に頼る以外に方法がなく、伊和辞典を作ろうと考えた。戦争を挟んで帰国が遅れた分、イタリア文化の知識を広げることができ、京都大学文学部に在職中に伊和辞典の編集に着手した。(野上素一の)日本不在中に元ミラノ領事井上静一氏の伊日辞典、元駐日イタリア大使館付武官スカリーゼ氏の伊日辞典があったがそれらは絶版となっており、先人の後を追って伊和辞典を作りたいと思った。伊英や伊仏辞典を日本語に移し替えると原意が歪曲されたり肝心なニュアンスが失われてしまうことがあるので、イタリア人が使用する伊々辞典から作成することにした。適確な日本語の訳語を発見するのはかなりむずかしかった。

野上素一が言及している2つの伊日辞典は、東京外国語大学文書館の大学史でもこの存在が匂わされていたが、やはり辞典というよりも、簡単な語彙集である。国立国会図書館デジタルコレクション⁽⁹⁾に収録されており、アクセスして閲覧することができる。現在の辞典や語彙集に比べてはるかに収録語が少なく、使いづらいものであったろう。

白水社から出版された『新伊和辞典』はその後、世界情勢の変化にともない、新語・新語義の追加の必要から1981年に増補版が刊行されている。『新伊和辞典』は伊和辞典のパイオニア的存在であろう。ところで大学書林から『イタリア語小辞典』というコンパクトサイズの伊和・和伊辞典が『新伊和辞典』と同じ頃に発行されている。この小辞典は小さくて軽く、持ち運びに便利であった。参考までに、辞典の参考文献のところに著者名と辞典名を付記しておく。

『新伊和辞典』ではアクセントをつけるところ(音節中の母音)にアクセント記号をふり、s と z を濁音で読む場合は、アルファベット表記に工夫をつけていた。また、品詞は s.m. s.f. agg. avv. intr. tr. ⁽¹⁰⁾ などという、略語表記に慣れなければどの品詞であるかわからないものであった。

役立つ便利なページとしては「不定詞を伴う場合の動詞表」が巻末に添えてあった。a, di, per のうちのどれを動詞の後につけて不定詞を続ければよいかを確認することができたため、イタリア語で作文をする時に非常に役に立つものであった。

『新伊和辞典』は現在入手できるものの、書店では扱ってはいない。古書として探すか、図書館で懐かしく目にして手に取るものである。

3-2. 小学館伊和中辞典

大阪外国語大学のイタリア語学科の研究者たちが中心となって作られた辞典が『小学館伊和中辞典』(以下、『伊和中辞典』)である。これは『新伊和辞典』が出版されてからほぼ

20年後に出版された、イタリア語学習者にとって有益な辞典となった。2025年現在も、伊和辞典としては最高のものである。

『伊和中辞典』の執筆者の代表である、大阪外国語大学名誉教授の池田廉は、イタリア文化に関心を寄せる人々が増えて興味の対象が広がってきていることを指摘し、音楽や美術の枠を越えて文学や歴史、政治・経済・法律や、自然科学へとその領域が広まってきており、食品・服飾といった生活文化や映画・音楽・美術の鑑賞等を通して、イタリアがかつての「遠い憧れの国」だったのが、今日「親しみのもてる身近な国」へと変貌しつつあると説き、次のように記述している。

外国語学習が広く日常生活化されることが望まれる。そのためには現代社会の多様な知的要求に応えることができ、しかも学習者のよき相談相手となる辞典がぜひとも必要であろう。(11)

『伊和中辞典』が刊行されて40年以上が経っているが、人によって違いはあるがやはり今でも「憧れの国」であろうし、『伊和中辞典』はイタリア語を学習する学生たちに一番推薦できる辞典である。『伊和中辞典』は初版では巻末の付録に、専門的な詳しい発音解説を載せていたが、1999年の第2版では、その部分を簡略化した発音や書記法解説に差し替え、文法解説も加えている。品詞も日本語の略語表記となっていて、日本人にとっては見やすいものである。『小学館伊和中辞典』の参考文献の一覧を見ると、イタリアの代表的な伊和辞典や、各国語辞典（伊英、伊仏など）や、日本の伊和辞典（『新伊和辞典』、『イタリア語小辞典』、数種の和伊辞典、専門用語辞典等々が挙げられており、語義を執筆するのに様々な労力を費やしていることがわかる。野上素一が作った日本人のための初めての伊和辞典が、数十年の時を経て、この『伊和中辞典』で完成を見たように感じられる。『伊和中辞典』のあとは、数種類の伊和辞典が刊行されているが、『伊和中辞典』ほどの規模の伊和辞典は世に出していない。

余談であるが、大阪外国語大学外国語学部イタリア語学科の出身である筆者は、入学時点では伊和辞典は野上素一の『新伊和辞典』だけしかなかった。大学1年時に、授業で単語や簡単な文章を覚えさせる目的で担当教員が教材として学生に購入させて使用したのが、*Vocabolario Minimo*⁽¹²⁾ という、イタリア語の重要基礎単語と同じ意味を、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の単語で書いている、簡単な例文付きの語彙集であった。筆者が習い始めて初めて触れた辞典が『新伊和辞典』であり、イタリアで出版された語彙集 *Vocabolario Minimo* であった。他に、当時辞書類に飢えていた新生であった筆者は、ペーパーバックの伊英辞典や、その他、日本国内の出版ではない語彙集やイタリア語の辞典を大学の生協で購入した記憶がある。20世紀後半は、実にイタリア語学習に必要な辞典は学生に用意されていて、これを使いなさい、ではなく、自分で探し求めなければならないものでもあったのだ。イタリア語の作文の時間に、『新伊和辞典』だけでは足りず、数冊の辞典

を教室に持参して悩みながら作文に取り組んだことも懐かしい。

3-3. 『伊和中辞典』以後の伊和辞典 — 21世紀に入って

1999年の『伊和中辞典』第2版の後、まず、小学館からポケットサイズの伊和辞典として『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』が2001年に出版された。これは『伊和中辞典』をコンパクトに編集して、ビジネスや旅行での機会に持参しやすいように作られたものであり、和伊辞典もついていて、便利なものであった。

次に白水社から2011年に『プリーモ伊和辞典』が出された。これは東京のイタリア語研究者たちが中心になって作られた辞典で、小さく「和伊付」と添えられた表題の辞典である。初心者向けで、巻末の付録には、発音と綴り字、数詞、動詞変化表、和伊語彙集とEメールの書き方まで添えてある。

2013年に三省堂から『デイリーコンサイス伊和・和伊辞典』が出版された。携帯に便利なサイズで、筆者も執筆に加わり、辞書を作ることの苦勞・労苦と、編集部の協力のありがたさが身に染みた。この辞書は、既刊の小学館のポケットサイズの辞典に負けない語彙を収容するという目標のもとで作られたもので、和伊と動詞変化表と、基礎文法についてのいくつかの表を辞書の表紙裏に付けている。

三省堂から2020年に、『ベーシッククラウン伊和・和伊辞典』というコンパクトな辞典が出た。これも筆者が監修で関わっているが、デイリーコンサイスの辞書をもとに、コンパクトなものに編集し直した。例文を増やし、日常会話表現を取り入れ、文法解説も詳しく入れた、初学者用の辞典で、三省堂編集部がコーパスを用いて、日本国内でよく使われているイタリア語を選び出したところが特色であろう。そういう理由から、語彙数は少なく、あると思ってこの辞書で探したが、その単語がないという場合がある。

以上の21世紀に入ってから出た4種類の伊和辞典と『伊和中辞典』を4月の授業開始時に、初めてイタリア語を習う学生たちに紹介し、それぞれの辞書の特徴を説明し、自分に合った伊和辞典を選ぶようにと薦めている。語彙数の点では『伊和中辞典』が最も推薦したい辞典ではあるが、辞書の値段を考えて無理強いせず、どれでも良いから授業に持ってきて欲しい、イタリア語の学習には辞書が必要であると学生に伝えている⁽¹³⁾。

では、なぜ伊和辞典が必要であるかということに話を進める。

4. 伊和辞典が必要な理由 — 問題点も添えて

4-1. 音声面

20世紀の伊和辞典には発音記号が載せられていないのが普通のことであった。伊和辞典というより、元々、伊伊辞典に発音記号の表記がなかったからである。最近の伊伊辞典は、外来語（イタリア語になった外国語）にはイタリア語ふうの発音記号をつけていたり、国際音声記号を付したりしているものもある。イタリア本国の辞典と同様に、21世紀に入ってから出された伊和辞典には発音記号にかわる「カタカナ」表記が付けられていて、それはそ

れなりに学習者には役に立っている。

イタリア語の発音は、日本語に似て、簡単に発音できると言われている(思われている)。子音プラス母音はローマ字読みをすればなんとかなるようで、日本語で主に外来語に使用される「カタカナ」をイメージして単語をつなげて発音すればなんとかなると思われているのである。実際、現在発行されているイタリア語の教科書でも、カタカナで発音が表記されていたり⁽¹⁴⁾、他方、国際音声記号を用いて発音を正確に教えようと試みている教科書もある⁽¹⁵⁾。

カタカナはイタリア語ではない。ローマ字もイタリア語ではない。イタリア語の発音で大文字 R 小文字 r の発音は、いわゆる巻き舌であるが、【ル】ではない。a,e,i,o,u とつなげて ra, re, ri, ro, ru を日本語の【ラ、レ、リ、ロ、ル】と発音してはならない。[ラ、レ、リ、ロ、ル] は la, le, li, lo, lu の発音と混同されてしまうのである。ローマの綴りを本学の学生に書かせると、Loma と綴る学生がいる。また、イタリア Italia は Itaria と書いてしまったり、「イタリアの」(イタリア語、イタリア人)の italiano は「イタリアーノ」というカタカナで馴染んでしまっているのか、itariano と書いてしまう学生もいる。L と R の差を示すため、カタカナ発音記号にひと工夫して、『プリーモ伊和辞典』は ra, re, ri, ro, ru をひらがなの[ら、れ、り、ろ、る]と表記して巻き舌の発音であることを示しているが、他の辞典では l なのか r なのかカタカナ表記だけを見てカタカナで覚えてしまうと綴りを間違ってしまうことになりかねない。

Ghizzoni(2005)は、カタカナの弊害について、saltare と salutare, sperare と superare, l'alma と l'arma を挙げて、これらがそれぞれ同じカタカナ表記がされてしまい、学生が綴りを間違ってしまうことを指摘している⁽¹⁶⁾。

カタカナ表記は便利なものであるが、教室で音声面でイタリア語と日本語の発音の細かな違いを強調して教えるべきである。文法の学習をし始める前、教科書を読み進めていく前に国際音声記号を駆使して教員が時間をとって教えるべきである。ほぼローマ字読みをして、アクセントのあるところを伸ばして流れるように読んでいけばイタリア語らしくなる、というふうに教えるのが楽であるが、実際は正確に教えるべきである。

ところで、伊和辞典に絡んでの国際音声記号の話を少ししておこう。国際音声記号は IPA (英語で International Phonetic Alphabet の略) と呼ばれている。イタリア語では AFI (Alfabeto Fonetico Internazionale) である。IPA を読めばネイティブスピーカーに近い発音ができるように開発されてきたので、日本でも中学や高校で英語の時間に発音記号を見る(習う)機会があったと思うが、イタリア語の発音で用いられる記号は、英語には無いものがある。

例えば、gli は伊和辞典のカタカナ表記では【リ】と表されているが、IPA では gli は、【ʎ】と表される。この記号を知らなければ、発音はできない⁽¹⁷⁾。

IPA は、伊和辞典によっては、重要語の場合、発音記号が付記されている⁽¹⁸⁾ので、カタカナ表記とともに覚えることで、うまくイタリア語の発音に親しんでいけるかもしれない。

『国際音声記号ガイドブック：国際音声学会案内』の日本語版付録の「主要諸言語における綴りと発音との関係」のイタリア語についての記述⁽¹⁹⁾で、IPA とともにカタカナでの読み方をつけてある。日本人にはカタカナなのだとは国際音声学会もカタカナ表記を認めているということなのかと納得させられた。インターネットが普及し、イタリア人の発音を聞ける機会が増えている現在、恵まれた環境を利用して、カタカナ発音も利用しながらイタリア語の音声面学習を順調にできれば良いと考えてしまう。

4-2. 音声面の問題 — 英語の影響や日本語に入り込んでしまったイタリア語

問題としては、IPA を読めない教員や学生が存在しているというところである。有本純・河内山真理(2019)によると、文部科学省は英和辞典を使わずに英語を中学高校で習わせようとする傾向にあるらしく、IPA も深くは解読できるとは限らない。また、英語の教員でもうまく発音ができないままに英語の授業をしているということらしい。英語については同じヨーロッパ言語であるイタリア語を学習する前提として理解して学修しておいて欲しいところであるため、発音だけに限らず、英文法にも励んでおいてもらいたいものである。

また、イタリア語由来の語が英語の影響を受けてしまったり、カタカナ表記が歪んでいる場合を目にするものがあり、少々不快感がある。

rucola というイタリア由来の植物は、日本では「ルッコラ」として知られているようであるが、実は発音として、あえてカタカナ表記をすると【ルコラ】(ルーコラ)であろう。促音【ッ】とはならない。また、地名については英語が混ざる場合があり、ミラノ(*Milano Milan*) はイタリア語のままであるが、ミラーノとは日本では言われていない。ヴェネツィア(*Venezia Venice*) はヴェネツィア、ヴェニスやらベニスやら、ベネチアという呼び方でも日本で通用している。ナポリ(*Napoli Naple*) はイタリア語のままのナポリであるが、ナーポリとは発音されない。*Roma* はローマであるのは別格なのだろう。

イタリア語を学ぶ者は、伊和辞典を参照しながら正しいイタリア語発音を習得してやる必要があると思う。変に日本語やら英語が混ざったものを勘違いして覚え込むよりも、イタリア語を学習して正しい発音の正しい覚え方をしてもらいたいものである。

4-3. 名詞や形容詞、動詞の変化の複雑さ — 伊和辞典に頼るということ

イタリア語は不規則変化については難解である。ドイツ語のような中性名詞はないが、男性名詞と女性名詞に分かれる。基本的な男性名詞と女性名詞は語尾変化が単純で、その語尾変化を覚えればなんとかなるが、例外的な語尾の変化もあり、辞典に頼らざるを得ない語も数多ある。単数形が男性名詞なのに、複数になると女性名詞になるものもあれば、男性名詞のように見えても、実は女性名詞というものもある⁽²⁰⁾。-co や-go で終わる男性名詞の複数形は -ci か -chi か、-gi か -ghi であるかは名詞によって違うが、辞書に複数形はどちらであるかを記してくれている。名詞を修飾する形容詞も、名詞と同様の変化をする。語尾変化が厄介なものは辞書で指示を与えてくれているのである。

動詞の不規則変化については、どの伊和辞典も巻末に「動詞変化表」を付けていて、最低でも 100 ほどの不規則動詞変化を載せている。辞典によっては 150 ほどある不規則動詞の変化を、単純時制だけで、直説法の現在、半過去、遠過去、未来、条件法現在、接続法現在と接続法半過去、命令法を並べている。また、それら不規則動詞には見出し語の下に、過去分詞とジェルンディオ形（と辞典によらない場合もあるが、現在分詞）を載せていて、過去分詞も不規則形が多いため、十分に役立つものである。動詞の変化については、単純時制の他に複合時制という、助動詞の *avere* もしくは *essere* の単純時制の後に過去分詞を添えて作る時制があり、複合時制には、直説法では近過去、大過去、先立過去、先立未来の 4 種類があり、それに条件法過去と接続法過去、接続法大過去が加わる。時制全てで合計 15 種類である。もちろん、文法の知識を得れば、複合時制についてはなんとかなる。単純時制でも規則変化の動詞は語尾変化を覚えればなんとかなる。なんともならないのは、単純時制の覚えにくい不規則変化であろう。本当に基本的な規則動詞や不規則動詞の変化は教科書に出てくる範囲の動詞を覚えこめば伊和辞典がなくても凌いでいけるであろうが、応用力をつけたり、色々なイタリア語に触れていきたい場合は、頼れるものはやはり伊和辞典であろう。

イタリア語の学修で時間がかかり、厄介なのは上述の時制を学ぶときである。本学では 2 年間にわたるイタリア語文法の学習の過程で、2 セメスターの途中から 3 セメスター目を越えるあたりまで時制の習得にかかってしまう。ここでは辞典と忍耐の格闘となる。複合時制を作るには助動詞の選択が必要であり、これも辞典に載せてくれている。伊和辞典はまさに、池田廉が著したように、学習者のよき相談相手なのである。長く辞典に親しむうちに徐々に単語や熟語を覚え込んでいき、難解なイタリア語の活用や語尾変化に慣れていくものである。

4-4. 文法学習や視覚的に役立つ伊和辞典

伊和辞典の巻末には、文法事項をまとめているものもあり、文法の確認が辞典を開きながらすぐにできるという利点がある。また、イタリア語を添えた、例えば楽器名やオーケストラの配置、パスタの種類やパンの種類、部屋割りをした家など、色々と工夫を凝らしている伊和辞典もある。視覚的な図を取り入れている辞典は最近のものに限るのではあるが、目で見て捉えて覚えられ、描いている絵が視覚的に楽しければ興味を持って学習することができるであろう。

ところで、電子辞書のことには触れずに紙の辞書のことばかりを述べてきたが、筆者は電子辞書よりも紙の辞書の方を推奨したい。電子辞書は壊れると使用できない。紙の辞書も何か災難、火や水の害を受けると使えなくなるが、電池は要らない。電子辞書を使う学生が、電池が切れました、と言って困る場面に出くわしたことがあった。また、電子辞書で動詞の変化を調べる場合は、画面が小さいので時間がかかる上、読み取りづらい。紙の辞書は、判の大きい辞典ほど見開きで不規則変化が見やすいのである。また、上述したような挿入されて

いる絵や図は、電子辞書にはない。

5. 本学での伊和辞典の現状

以上、代表的な、ほぼ現在刊行されている伊和辞典について概観し、伊和辞典の短所や長所を確認してきたのであるが、大阪音楽大学の学生における伊和辞典について考えていくことにする。

5-1. 学生がイタリア語学修で求めていること

モチベーションの問題が絡んでくる。イタリア語を必修科目として選択した学生の場合、英語が嫌いでもう英語を選択したくないからという理由の学生がいる一方、声楽のため専攻の先生に勧められた声楽専攻の学生が大半を占めている。

声楽専攻でもイタリア語を発音できればそれで良いという学生もいる。言語の中身を知り、背景の文化や歴史などを、言語を通じて知る力を得たくないのかと残念に思うこともある。他の専攻の学生で、音楽関係の学生は留学を視野に入れている場合もあるし、一般教養程度で卒業単位を取得できればそれで良しという学生もいる。従来の音楽を専攻とする学生たちに加えて、経済や経営学科のような専攻やコースが増設されている⁽²¹⁾本学で、ひとクラスの中で様々な学生たちが受講するようになると、授業進行の能率が下がる恐れがあるかもしれない。専攻別、目的別のクラス分けがあれば理想であると思うが、その一方、数年間「習熟度別クラス」を作った経験から理想と現実は違うという結果に行き着いている。

声楽専攻で歌に活かせるイタリア語をと考えている学生が少なからずいることから、伊和辞典でも最近取り入れ始めている IPA の指導や、カタカナ発音でもイタリア語の発音の仕方をまずは時間をかけて教えることで、その後は独力でも伊和辞典を使用して発音の学習をしていけるのではないかと考えるが、それには、何せ、授業時間が足りない。イタリア語の文法は教えるべきことが多く、発音だけに時間を割くわけにはいかない、でも発音も十分に教えたいというディレンマ⁽²²⁾がある。

5-2. 伊和辞典を持たない場合

伊和辞典を薦めてもそれを持たずに授業を受ける学生が数人、毎年必ずいる。数年前にどうしても辞書を持たないままにイタリア語を履修した学生がいた。その学生は、1年次は成績は悪くなかったが、2年次になって徐々に点数が取れなくなった。教科書の範囲を超えて、応用力という点で伊和辞典に親しむことがなかったので成績が落ちていったのかもしれないし、他に原因があったのかもしれないが、人間は覚えることができるのにも限界があり、それを補うのが外国語学習の場合、辞書であると思う。会話系のクラスであれば、会話をしながら、わからない単語や語句がどういう意味であるかを教員や教室の仲間に尋ねて切り抜けていくことができるかもしれないが、文法や講読の授業では、予習時からして辞典が必要になってくる。伊和辞典なしでは特に何かを読む、読み込むというクラスではやっていけ

ないのである。

他方、履修期間が学部の半分である短期大学部の授業や、選択クラスの速習外国語（イタリア語）で教養程度のイタリア語を1年間のみ受講する場合は、伊和辞典を持たなくても単語の語義や用法の知識を得られるように考えなければならないのかもしれない。

5-3. 伊和辞典を引くことの意味

文法知識を積み重ねて辞書で確認することで、イタリア語の文章を読み取る際の誤訳や勘違いが少なくなる。

例を挙げる。生半可の文法知識だけでは間違えるという例である。

Aiuto! というイタリア語の定番表現がある。「助けて！」の意味である。他動詞 *aiutare* の直説法現在1人称単数の形が、*aiuto* で、*Aiuto.* というのは「私は助ける」という意味になる。*Aiuto!* の *aiuto* は男性名詞単数形の「援助、助け」である。さて、あるイタリア語学習者が、「助けてほしいのに、私が助けます、という言い方って変ですね、イタリア語って。」と言っていた。辞書を落ち着いて見て考えると変な言い方ではないことはわかる。

Dove abiti? を、*dove* と *abito* の複数形の意味を繋げて、「どこに服があるの？」と訳す初心者は少なくない。*abitare* は自動詞「住む」であるので、疑問詞の *dove* 「どこに」の次に来るのは動詞の変化形であるからには、「君、どこに住んでいるの？」と訳してほしい。この例は、基本文法の文章の組み立て方を踏まえれば *abiti* が *abito* の複数ではないことがわかるのであるが、辞書があればクリアなことになる筈である。

イタリア語のクラスで全盲の学生を教えたことがあった。その学生は、点字のイタリア語の辞書がないので辞書を用意できない⁽²³⁾と言ってきたので、辞書がなくても頑張ってもらうことにした。当時使っていた教科書は、中学や高校の英語の教科書のように、講読や会話文の下の欄に、新出単語や熟語、場合によってはその日本語の意味まで添えているものだった。*però* という語があるが、「しかし、だが」の意味で先ず授業で教えた。その数ヶ月後に、教科書の後ろの方で、同じ *però* という語が、「へえ！」という驚きの表現で出てきた。その全盲の学生は、「え、*però* ってしかし、という意味ではないのですか？」と驚いていた。授業でその都度習った単語や語句を覚えながらイタリア語を学習してきたその学生に、ひとつの単語でも、いくつかの語義があるのだから伊和辞典が必要なのだと言いたかった。

6. 最後に

成績は良くないが単位を取りたいだけでイタリア語を選択して受講するのも良い。中学や高校で外国語（英語）の授業で嫌な目に遭ったり、勉強しなくても成績が取れたのでその調子で進んでいけば良いというものもそれでも良い。読む力よりコミュニケーションの手段

としての外国語という選択をしているのであれば、伊和辞典がなくてもいわゆる耳コピのような語学学習で切り抜けていけるのなら、それでも良い。すべて習う側の自己責任であり、教員は学生が学んだ結果を点数化して、合格点を取れる学生であれば単位を与えれば良いのであろう。文科省が決定した大綱化は、総合的に一般の大学の受講科目を考えて決定されたことであろうが、音楽大学では一般の大学に比べて、イタリア語、フランス語やドイツ語はその専門分野に近いところにあるはずである。大学が自由に単位数を考えられるのであれば、そのあたりも考慮して行ってほしいと内心思っている。

イタリア語を選んで学習し始めた学生には、簡単な単語や語句ほど何度も伊和辞典を引いて眺めて楽しみながら語学を学ぶ術を学んでほしいと思う。教員が単語や文の意味を教えて学生が受け身のままいるのではなく、学生が慣れない辞書を引きながら⁽²⁴⁾、新しく習う言語であるイタリア語を、伊和辞典を使いながら、イタリア語って面白い、辞書の使い方がわかったから自分一人でもこれから何か読んだり、イタリア語の学習を続けていける、という結果を持ってもらえれば幸いである。

筆者は授業で学生が伊和辞典を極力使えるよう、辞書の使い方を授業中にまめに説明している。辞書を使うように指示しても、外箱から出して、引き終えたらさっさと外箱にしまう学生がいる。授業中でも気になることがあれば積極的に調べるように、簡単な頻出単語ほどよくチェックするようにと指示しているが、自発的に調べる学生はほんのわずかである。最近では、課題プリントをまめに作成し、配布して1週間後に提出したら添削をして返すという方式を取っている。伊和辞典をロッカーに放置せず、親しんで使って行ってほしいと思っている。AI という強敵が現れているが、それでも良い。何かを調べるということに取り組んでほしいからである。伊和辞典は必要であるかと問われれば、伊和辞典を作った先人たちの労苦や、伊和辞典の内容の充実ぶり、参考書に代わる書物であることを考えれば、必要であると筆者は答える。

伊和辞典を活用してイタリア語の力を効率的に磨いていけるようなイタリア語教育法、イタリア語習得法についても考えてみたいものである。

注

- (1) 本稿では「学修」と「学習」という2つの表現を用いる。双方ともに、「学ぶ」という意味では変わらないが、「学修」では学んだ上で何か得るものがあるという意味合いを持たせ、「学習」は成果があるというよりも、単に「学ぶ」という作業を表す意味で使い分けることとする。
- (2) 谷口真生子(2022)「本学のイタリア語学修にみられる問題点」『大阪音楽大学研究紀要 第六十一号』42-44
- (3) 短期大学部のイタリア語学修については学生の学びの姿勢に期待しつつ教えられる

ことを教えたいと焦って終わりになってしまいうようなところがある。短期大学の学生でイタリア語履修の更なる継続を希望する場合、時間割でうまく合えば、学部の2年目のクラスに合流できる。しかし、これには問題があり、学部の必修イタリア語は週2コマであるため、短期大学生が2年目にイタリア語を継続した場合、学部の学生たちよりもイタリア語に触れてきた時間数が少ないというハンデがあり、授業についていくのに努力が必要となり、実際、短大生が2年目にイタリア語の文法を継続履修し始めても、途中で挫けてしまうということがあった。

- (4) 2025年7月に教務と外国語部会との話し合いで、先ずは大学側(教務)がカリキュラム案を提示してきた。
- (5) 文法を終えた後の読解力をさらに深めるための選択科目の「応用外国語(イタリア語)A・B」も廃止になる。この科目は最近、少人数の受講生のクラスであったため、廃止対象になっても仕方がないものであったが、毎年さらなる学修を希望する学生がわずかながらいたことを思うと残念である。
- (6) 数種類の教科書を過去に使用してきたが、本稿では教科書批判をしたわけではないので、具体的な教科書名は挙げるつもりはない。今までに使用したうちで簡単過ぎる内容の教科書は、主に短期大学のb I・b IIクラスで使用したことがあるもので、敬語と敬語を使わない相手との2パターン会話を中心とした15単元からなり、単元ごとに1ページ分の練習問題が用意されているが、教科書に書いてある表現を写せばよいような練習問題であったことは記しておく。
- (7) 東京外国語大学文書館 TUFs Archives 東京外国語大学の歩み
<https://www.tufs.ac.jp/common/archives/TUFShistory-Italian-3.pdf> (2025年9月27日閲覧)
- (8) 新伊和辞典の著者である。母親は野上弥生子。東京帝国大学文学部卒業後、日伊交換学生第一号としてローマ大学に留学し、戦後帰国の後は、京都大学にて教鞭をとった。1950年「日本ダンテ学会」を、1951年に「イタリア学会」を創立し、1964年に『新伊和辞典』を編む。日本のイタリア語教育や文化の礎を築き貢献し、イタリア文学の研究者として真に偉大な人物である。
- (9) 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>) で「伊日辞典」で検索・閲覧ができる。検索した『伊日辞典』に次の3点がある。
 吉田弥邦, 藤堂高紹 共著. 伊日辞典, 伊日辞典刊行会, 1938
 井上静一 著ほか. 伊太利語辞典. 増補版, 第一書房, 1942
 Guglielmo Scalise 編. Dizionario Italiano-Giapponese : con una appendice dei termini militari, ア・マルジャリア, 1940.11
 スカリーゼの語彙集は、イタリア語の説明と、ローマ字表記と日本語が書かれていて、当時の辞典・語彙集の編纂の工夫を感じることができて興味深いものである。
- (10) s.m. s.f. agg. avv. intr. tr. これらの略語は順に 男性名詞、女性名詞、

形容詞、副詞、自動詞、他動詞 を意味している。

- (11) 池田廉(1985) 『伊和中辞典』のまえがきより。
- (12) Baldelli, I. Mazzetti, A. *Vocabolario minimo della lingua italiana per stranieri*, Le Monnier, Firenze 1977 タイトルが「外国人のためのイタリア語の最小限の辞書」という意味の語彙集で、1741語のイタリア語の基本単語が掲載されており、主要4カ国語と比較しながら単語やその語を使った簡単な文章に親しむことができた。この語彙集で学習したことは、今でも筆者の宝物のうちのひとつとなっている。
- (13) 父親か母親、ひょっとすると祖父や祖母が持っていたという『新伊和辞典』を授業に持参する学生が稀にいる。そういう場合、辞書は慣れるほどに使いやすくなるものだと言ってそのまま使うようにさせている。言語は時代とともに変化していくものなので、使いづらいつ感じれば、学生が何か手立てを考えるだろうと思っている。
- (14) 発音やアルファベットのところでカタカナ表記がされている教科書に次のものがある。
- 杉本裕之(2022)『基礎イタリア語講座 三訂版』朝日出版社
一ノ瀬俊和(2013)『最新 ア・ゾンゾ 更新改訂版』朝日出版社
マッテオ・カスターニャ、吉富文(2015)『イタリアーノ・イタリアーノ』朝日出版社
- (15) 発音記号をまともに載せているのが、東京大学イタリア語教材編集委員会編(2009)『イタリア語のスタート 文法と練習』白水社 と、最近では、有田豊、中山明子(2023)『ボナペティート！—美味しいイタリア語、めしあがれー』朝日出版社 である。後者の教科書の題名の日本語が、カタカナ表記の「ボナペティート」であるのが少々残念な気がする。イタリア語の発音で正確にカタカナ読みをすると、*Buon appetito!* は [ボナッペティート] (太字はアクセントの位置) ではないかと思われるからである。
- (16) Ghizzoni, L.(2005) “Katakana” in *Insegnare italiano in Giappone*, Istituto Italiano di Cultura, Tokyo p.94
- (17) 少し唇に隙間を開けて、舌の先を下の歯と歯茎のあたりに触れさせ気味にして、喉の奥から【リ】と発してみてごらん、と授業では筆者は教えている。
- (18) 『プリーモ伊和辞典』、『ベーシッククラウン伊和・和伊辞典』でカタカナ表記と併記。
- (19) 『国際音声記号ガイドブック：国際音声学会案内』p.289
- (20) 前者では例えば「卵」は単数が *un uovo* で男性名詞なのに、複数が *le uova* と女性複数形になる。男性名刺の基本形の *-o* の語尾は複数 *-i* というのではない。後者の例では、語尾が *-o* で男性名詞に見えるが女性名詞の *mano* (手)。*mano* は複数形が *mani* となり、辞典で調べて確認しないと男性名詞であると思ってしまう名詞である。
- (21) 大阪音楽大学で2022年度に新設されたミュージックビジネス専攻は、2025年度ま

でのところ、英語科目のみを必修外国語として、ミュージックビジネス専攻生だけの英語クラスで授業を行なっているため、イタリア語を必修科目としては選ぶことができない。現在までのところ、選択科目の速習外国語（イタリア語）を受講した学生もいない。一方、短期大学の音響照明コースではイタリア語を選ぶことができるため、音響照明コースでは2024年度は1名、2025年度は5名がイタリア語を受講し、2025年度の受講者5名のうち2名が伊和辞典を持っている。

- (22) ジレンマ、板挟みの意味を持つディレンマはイタリア語のカタカナ読みで、綴りは dilemma である。レは r ではない。また、dilemma は語尾が -a で終わるため女性名詞に見えるが、実は男性名詞である。やはり、イタリア語を読んで理解するためには、伊和辞典が必要である。
- (23) 実際のところ、点字によるイタリア語の辞書は存在していたようである。その数年後に別の全盲学生がイタリア語を受講したが、何巻にもわたる膨大な語彙集をその学生は所持していた。（市販されているものであるかは未確認。）
- (24) 辞書を引くことに慣れていない学生が多いことに驚かされてきたが、最近はその光景に慣れてしまった。ABC の順がわからず、ABCD…と歌いながら辞書に向かう学生やら、そばで見ていると、こちらが手伝いたくなる学生がいたり、挙げ句の果てに「辞書にありません」と断言し、「そんなことはない、貸して！」と筆者が探しだして示したりの連続なのである。

主要参考文献

伊和辞典(刊行年順)

- (下位英一, 坂本鉄男 編(1962) 『大学書林イタリア語小辞典』 大学書林)
野上素一 (1981) 『新伊和辞典 増訂版』 白水社 ※1964年初版
池田廉 他(1983) 『小学館伊和中辞典』 小学館 ※1999年に第2版
郡史郎, 池田廉 編(2001) 『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』 小学館
高田和文 他(2011) 『プリーモ伊和辞典』 白水社
藤村昌昭 監修(2013) 『デイリーコンサイス伊和・和伊辞典』 三省堂
杉本裕之, 谷口真生子 監修(2020) 『ベーシッククラウン伊和・和伊辞典』 三省堂

国際音声学会 編(2003) 『国際音声記号ガイドブック：国際音声学会案内』 大修館書店

論文

- Ghizzoni, L.(2005) “Katakana” in *Insegnare italiano in Giappone*,
Istituto Italiano di Cultura, Tokyo

有本純・河内山真理(2019)「発音指導と発音記号：辞書使用の諸問題」教育総合研究叢書＝
Studies on education 12号 101-112 <http://id.nii.ac.jp/1084/00000556> (2025年9月25
日閲覧)

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目
(2024年度)

修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目

1. 作曲専攻(作曲) 宮内 栄輝
(演奏曲名)
グッド・バイ

(論文名) 作曲技法とその表現～シェーンベルク作品の根底にあるもの～

修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目

2. 声楽専攻(オペラ) 赤迫 祐花
(演奏曲名)
R.レオンカヴァッロ / Ruggero Leoncavallo (1857-1919)
歌劇「道化師」より / I Pagliacci

(論文名) 台本作家としてのレオンカヴァッロと作曲家としてのレオンカヴァッロ
《道化師》を通して
3. 声楽専攻(オペラ) 徳田 梨沙
(演奏曲名)
G.ヴェルディ / Giuseppe Verdi (1813-1901)
歌劇「リゴレット」より / Rigoletto

(論文名) ヴェルディのオペラ《リゴレット》
—オペラ台本と原作との比較を通して見るジルダの人物像—
4. 声楽専攻(オペラ) 樋口 亮太
(演奏曲名)
D.チマローザ / Domenico Cimarosa (1749-1801)
歌劇「宮廷楽師長」 / Il maestro di cappella

(論文名) 《宮廷楽士長》～謎に包まれたこの作品を改めて再考する～

5. 声楽専攻(オペラ) 山口 奈津実
(演奏曲名)

G.プッチーニ / Giacomo Puccini (1858-1924)
歌劇「ラ・ボエーム」より / La Bohème

(論文名) プッチーニのオペラ《ラ・ボエーム》—原作、台本、演出から見るミミのイメージ—

6. 声楽専攻(歌曲) 吉岡 七海
(演奏曲名)

J.ブラームス / Johannes Brahms(1833-1897)
《9つのリートと歌》作品 32 より 《9 Lieder und Gesänge》 op. 32
IX. 我が妃よ、そなたはなんと Wie bist du meine Königin

《5つのリート》作品 105 より 《5 Lieder》 op. 105
I. 歌の調べのように何かかよぎり Wie Melodien zieht es mir
II. まどろみはいよいよ浅く Immer leiser wird mein Schlummer
IV. 墓地で Auf dem Kirchhofe

《5つのリート》作品 106 より 《5 Lieder》 op.106
I. セレナード Ständchen

《4つのリート》作品 43 より 《4 Lieder》 op.43
I. 永遠の愛 Von ewiger Liebe

《2つの歌》作品 91 より 《2 Gesänge》 op.91
I. ひそかな憧れ Gestillte Sehnsucht
II. 聖なる子守唄 Geistliches Wiegenlied

(論文名) ヨハネス・ブラームスの歌曲作品における声種による演奏効果

～《2つの歌 アルトとヴァイオラとピアノ伴奏のための》作品 91 の場合～

7. 器楽専攻(ピアノ) 奥野 朱音
(演奏曲名)

S.プロコフィエフ / Sergei Prokofiev (1881-1953)

バレエ「シンデレラ」からの10の小品 作品97より

10 Pieces from "Cinderella" op.97

II. 夏の精 Summer Fairy

バレエ「シンデレラ」からの6つの小品 作品102より

6 Pieces from "Cinderella" op.102

I. ワルツ (シンデレラと王子) Waltz (Cinderella and the Prince)

III. 喧嘩 The Quarrel

VI. 愛を込めて Amoroso

ピアノ・ソナタ 第8番 変ロ長調 作品84 Piano sonata No.8 in B flat major op.84

I. Andante dolce

II. Andante sognando

III. Vivace

(論文名) S. プロコフィエフのピアノ・ソナタ第8番における交響性

8. 器楽専攻(ピアノ) 巨嶋 玖実

(演奏曲名)

J.ブラームス/Johannes Brahms (1833-1897)

6つの小品 作品118 Klavierstücke, op.118

I. Intermezzo

II. Intermezzo

III. Ballade

IV. Intermezzo

V. Romanze

VI. Intermezzo

4つの小品 作品119 Klavierstücke, op.119

I. Intermezzo

II. Intermezzo

III. Intermezzo

IV. Rhapsodie

(論文名) ミクロ・コスモスとしてのブラームス晩年のピアノ小品

9. 器楽専攻(ピアノ) 加古 彩子
(演奏曲名)

F.F.ショパン / Frédéric François Chopin (1810 -1849)

24 の前奏曲 作品 28 24 préludes op.28

- I . Agitato
- II . Lento
- III . Vivace
- IV . Largo
- V . Allegro molto
- VI . Lento assai
- VII . Andantino
- VIII . Molto agitato
- IX . Largo
- X . Allegro molto
- XI . Vivace
- XII . Presto
- XIII . Lento
- XIV . Allegro
- XV . Sostenuto
- XVI . Presto con fuoco
- XVII . Allegretto
- XVIII . Allegro molto
- XIX . Vivace
- XX . Largo
- XXI . Cantabile
- XXII . Molto agitato
- XXIII . Moderato
- XXIV . Allegro appassionato

(論文名) ショパン《24 の前奏曲》作品 28 の構成についての一考察

10. 器楽専攻(ピアノ) 加藤 舞香
(演奏曲名)

B.バルトーク / Béla Bartók (1881-1945)

ルーマニア民俗舞曲 BB 68 Sz 56 Román Népi Táncok BB 68 Sz 56

- I . 棒踊り Jocul cu băță

- II. 帯踊り Brâul
- III. 足踏み踊り Pe loc
- IV. ブチュム人の踊り Buciumeana
- V. ルーマニアのポルカ Poarga Românească
- VI. 速い踊り Măruntel

ハンガリー農民歌にもとづく即興曲 op.20 BB 83 Sz 74

Improvizációk magyar parasztdalokra op.20 BB 83 Sz 74

- I. Molto moderato
- II. Molto capriccioso
- III. Lento, rubato
- IV. Allegretto scherzando
- V. Allegro molto
- VI. Allegro moderato, molto capriccioso
- VII. Sostenuto, rubato
- VIII. Allegro

W.A.モーツァルト / Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ピアノ・ソナタ KV 547 Anh.135 Piano Sonata KV 547a Anh.135

- I. Allegro
- II. Rondo: Allegretto

B.バルトーク / Béla Bartók (1881-1945)

ピアノ・ソナタ BB 88 Sz 80 Piano Sonata BB 88 Sz 80

- I. Allegro moderato
- II. Sostenuto e pesante
- III. Allegro molto

(論文名) 「混成」音楽としてのバルトークの《ピアノソナタ》BB88

——分析と演奏解釈の試み——

11. 器楽専攻(ピアノ) 鈴木 美奈

(演奏曲名)

R.シューマン / Robert Schumann(1810-1856)

アラベスク ハ長調 作品 18 Arabeske C-dur op.18

花の曲 変ニ長調 作品 19 Blumenstück Des-dur op.19

フモレスケ 変ロ長調 作品 20 Humoreske B-dur op.20

I .Einfach

II .Hastig

III.Einfach und zart

IV.Inning

V .Sehr lebhaft

VI.Mit einigem Pomp

VII.Zum Beschluss

(論文名) 《フモレスケ》作品 20 における音楽形式上の新たな試み

12. 器楽専攻(ピアノ) 園田 育実

(演奏曲名)

R.シューマン / Robert Schumann(1810-1856)

アラベスク ハ長調 作品 18 Arabeske C-dur op. 18

交響的練習曲 作品 13 Symphonische Etüden op. 13

主題 Thema - Andante

練習曲 I : Un poco più vivo Etüde I - Un poco più vivo

練習曲 II Etüde II

練習曲 III : Vivace Etüde III

練習曲 IV Etüde IV

練習曲 V Etüde V

練習曲 VI : Agitato Etüde VI

練習曲 VII : Allegro molto Etüde VII

練習曲 VIII Etüde VIII

練習曲 IX : Presto possibile Etüde IX

練習曲 X Etüde X

練習曲 XI : Con espressione Etüde XI

練習曲 XII : Allegro brillante Etüde XII

(論文名) R. シューマンの《交響的練習曲》における「交響的」の意味

——作品・演奏解釈の1つの試み——

13. 器楽専攻(ピアノ) 中森 和輝
(演奏曲名)

R.シューマン / Robert Schumann(1810-1856)

ノヴェレット 作品 21 より Novelletten op.21

I. Markiert und kräftig

II. Äußerst rasch und mit Bravour

III. Leicht und mit Humor

IV. Ballmäßig. Sehr munter

VI. Sehr lebhaft mit vielem Humor

VII. Äußerst rasch

VIII. Sehr lebhaft

(論文名) R. シューマンの《ノヴェレット》作品 21 の作品・演奏解釈

——《クライスレリアーナ》作品 16 との比較を通して——

14. 器楽専攻(ピアノ) 山下 楓音
(演奏曲名)

F.シューベルト(F.リスト編曲) / Franz Schubert (1797-1828) arr.by Franz Liszt

12 の歌 S.558 より 12 Lieder S.558

第 7 曲「春の想い」 No.7 Frühlingsglaube

白鳥の歌 S.560 より Schwanengesang S.560

第 7 曲「セレナーデ」 No.7 Ständchen

G.ヴェルディ(F.リスト編曲) / Giuseppe Verdi (1813-1901) arr.by Franz Liszt

「シモン・ボッカネグラ」の回想 S.438

Réminiscences de Simone Boccanegra S.438

V.ベッリーニ(F.リスト編曲) / Vincenzo Bellini(1801-1835) arr.by Franz Liszt

「ノルマ」の回想 S.394 Réminiscences de Norma S.394

(論文名) フランツ・リストの「回想」と銘打たれたオペラ・パラフレーズについて

——《ノルマの回想》の分析と演奏解釈を中心に——

15. 器楽専攻(管弦打) 入口 七海

(演奏曲名)

B. マントヴァーニ / Bruno Mantovani (1974-)

バグ / Bug

J. ブラームス / Johannes Brahms (1833-1897)

クラリネットとピアノのためのソナタ 変ホ長調 作品 120-2 /

Sonate für Klarinette und Klavier Es-dur, op.120-2

I . Allegro amabile

II . Allegro appassionato

III . Andante con moto

(論文名) ブラームスの室内楽曲におけるクラリネットのあり方

《クラリネットとピアノのためのソナタ 変ホ長調》作品 120-2 を中心として

16. 器楽専攻(管弦打) 的場 未来

(演奏曲名)

G. コシンスキー / Gene Koshinski (1980-)

シンク / SyNc for Solo Snare Drum

H. ラッヘンマン / Helmut Lachenmann (1935-)

インテリアール I / Intérieur I für einen Schlagzeugsolisten

J. ササス / John Psathas (1966-)

打楽器アンサンブルのためのマトルズダンス /

Matre's Dance for Percussion Ensemble

(論文名) 打楽器独奏のための現代作品における記譜の多様性

[作曲者名、演奏曲名は修士演奏会のプログラムに基づく。また、論文名は本人記載の題目届に拠る。]

執筆者一覧（掲載順）

竹田和子（外国語）

谷口真生子（外国語）

研究委員会構成員（五十音順）

* 西村 理 赤松 林太郎

谷口 真生子 鳥居 知行

長山 慶子 松田 昌恵

松本 昌敏 吉村 治広

*印は編集代表

研究紀要 第六十四号

2026年3月1日 発行
(2026年3月31日 WEB公開)

編集 研究委員会

発行

大阪音楽大学
大阪音楽大学短期大学部
〒561-8555
大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番8号
電話 06-6334-2136
URL : <http://www.daion.ac.jp/>

ISSN 0286-2670

BULLETIN
OF
OSAKA COLLEGE OF MUSIC

Vol. LXIV

2025

Contents

Summaries (1)

Articles

Das Bild der Familie von Wilhelmine Heimburg

— Im Zusammenhang mit ihren Romanen der 1890er Jahren

..... TAKEDA Kazuko (4)

Note

Riflessione sullo studio della lingua italiana come materia obbligatoria e sui dizionari italiano-giapponese presso l'Osaka College of Music

—È necessario o no consultare il dizionario quando si studia l'italiano? —

..... TANIGUCHI Makiko (17)

Published by
Osaka College of Music
Osaka Junior College of Music
Osaka
JAPAN